待兼山俳句会

第七百回

令和七年五月十九日（月）　会場　大阪倶楽部　会議室　締切　午後二時

世話人　山田安廣・上田恵子・鈴木輝子・根来眞知子
東中　乱・向井邦夫・森　茉衣

出席者　瀬戸幹三・山戸暁子・上田恵子・小出堯子・鈴木輝子・鈴木兵十郎・寺岡　翠・根来眞知子
東中　乱・向井邦夫・山田安廣

投句者　碓井遊子・西條かな子・中嶋朱美・中村和江・西川盛雄・東野太美子・平井瑛三・森　茉衣
以上出席者十一名＋投句者八名　計十九名

兼　題　罌粟の花・薄暑（幹三）　樟若葉・蕗（暁子）　当季雑詠　通じて八句

次　回　例会　令和七年六月十六日（第三月曜日）会場　大阪倶楽部会議室　締切　午後二時
兼題　夏の山・冷蔵庫（幹三）　蟻・緑蔭（暁子）　その他当季雑詠

選者吟

どの道も海へ傾げる町薄暑　幹三

蕗の葉のまだまだ広くなるつもり
揺れながらくづれてゆける罌粟の花

採りたての蕗を煮てゐる香りかな　暁子

大空の緑雲となる樟若葉
道少し遠く感じる薄暑かな

幹三　選

村ざかひ樟の大樹の若葉かな　遊子
大空の緑雲となる樟若葉　暁子
◎駆けて行く少女の背中追ふ薄暑　安廣
芍薬の蕾爆ぜたり二百倍　兵十郎
夫語るリュックから出す蕗と土　恵子
樟若葉明りの中や石祠　兵十郎
登らねば家に帰れぬ坂薄暑　輝子
一人居の薄暑の昼の物思ひ　眞知子
旧友と会ふ日はあした樟若葉　輝子
蕗茹でて野の香溢るる厨かな　堯子
◎風無くて罌粟の花散る夕べかな　瑛三
樟若葉風を集めてをりにけり　暁子
薄暑なり君をデッキに立たしめよ　恵子
巡礼の道登りゆく山薄暑　茉衣
◎軽暖や初見の母の俳句帳　翠
樟若葉人恋ひ初めし子の瞳　輝子
朝採りの蕗の苦味のかく淡く　兵十郎
抜かれても抜かれてもなほ罌粟の花　堯子
田を渡る故郷の香や薄暑光　兵十郎
金魚鉢巨きな顔がヌッと出て　盛雄
◎採りたての蕗を煮てゐる香りかな　暁子
蕗の葉の重なり合うて風に揺る　邦夫
◎降り来たる闇の匂へる薄暑かな　安廣
御社の雨の明るき樟若葉　翠
むくむくと全方向に樟若葉　邦夫
軽暖の今をのがさじ一日旅　太美子
◎人影の無きふるさとの葱坊主　かな子
爪黒くして蕗の筋取る二人かな　安廣
◎金婚の日忘れて過ぎぬ蕗を煮る　輝子
いまひと時嫋やかに揺れ樟若葉　眞知子
幼時より見上げし大樹樟若葉　翠

幹三　特選句講評

・駆けて行く少女の背中追ふ薄暑　安廣

生命力にあふれている少女には夏が似合う。駈けている背中に初夏が追いつこうとしているのか、駈けて行く先々に夏の断片が生まれていくのか。微妙な擬人化が若い夏を表現。

・採りたての蕗を煮てゐる香りかな　　暁子

どんな香りか、どこで煮ているか、すべてを言わないことで蕗の新鮮さが際立って伝わってくる。一物仕立ての見本。俳句の省略の大切さを思う句。

・風無くて罌粟の花散る夕べかな　　瑛三

この句も前の句と同じくあっさりしている。故にすとんと腹に落ちて来る。読者はそれぞれの「自分の夕べ」を頭に描くのである。俳句はぶっきらぼうに作れ、とは我が師・鳥居三朗の教え。

・軽暖や初見の母の俳句帳　　翠

季語がいい仕事をしている。母の句帳は母の心の中を覗く、知らない母の一面を見る思いがある。今日まで見なかったのもそういう理由なのではないか。「軽暖」であり「薄暑」である。

・降り来たる闇の匂へる薄暑かな　　安廣

「降り来る闇」「匂う闇」はややもすると詩情が強すぎて嫌味になるところだが、全てを季語に集約して終ることが、この句をすてきなバランスで成立させた。それは一句目の「背中を追う」にも言えること。二句の作者の技量に感心する。

・人影の無きふるさとの葱坊主　　かな子

この句をビジュアル化すると手前に葱畑があり遠景に村落、そして村の中の道を作者が一人歩いている、ということに。よく「景が見える句」と言うがまさにそれ。ところで「葱坊主」は晩春の季語です。俳句では季節の先取りはしますが、あまり「後退」はしません。そこはご注意ください。

・金婚の日忘れて過ぎぬ蕗を煮る　　輝子

まさにスライス・オブ・ライフ。生活の一片です。何ごともないことこそが幸せであり人生の喜びである、と。煮ているものが芋でも南瓜でもなく蕗であるところが実にいい。

暁子　選

朝採りの蕗の苦味のかく淡く　兵十郎
野良仕事終へて一息夕薄暑　堯子
芥子の花美と毒秘めてゆらゆらと　眞知子
夕薄暑手首にのこる輪ごむ跡　幹三
煮豆どうぞの声や戸外は夕薄暑　翠
◎風無くて罌粟の花散る夕べかな　瑛三
軽暖の今をのがさじ一日旅　太美子
蕗の筋取りてささやか夫内助　乱
◎青物屋道にはみ出す薄暑かな　幹三
風受けて振り子の如く罌粟の花　堯子
爪黒くして蕗の筋取る二人かな　安廣
登らねば家に帰れぬ坂薄暑　輝子
思はるる種呉れし人芥子の花　乱
蕗の葉を傘にもしたき日和かな　瑛三
下処理の済みたる蕗のすまし顔　翠
すり寄れる猫押し退くる薄暑の日　輝子
くせになる灰汁の強さや野路の蕗　兵十郎
伽羅蕗やコツは灰汁抜き母の声　和江
◎幼時より見上げし大樹樟若葉　翠
揺れながらくづれてゆける罌粟の花　幹三
◎樟若葉明りの中や石祠　兵十郎
熊楠の守りし樟に若葉湧き　堯子
三叉路を見つめ幾年樟若葉　堯子
知らぬ間に万歩を歩む薄暑の日　朱美
納得のゆかぬ句を提げ句座薄暑　太美子
蕗の葉のまだまだ広くなるつもり　幹三
◎むくむくと全方向に樟若葉　邦夫

暁子　特選句講評

・風無くて罌粟の花散る夕べかな　瑛三

花びらが薄く、崩れやすいこの花の特徴を捉えられた。何よりも句の調べが美しい。

・青物屋道にはみ出す薄暑かな　幹三

この句は薄暑という季語を野菜の豊富さで表現された。暑いというほどではないが、少し汗ばむ五月、畑の物はぐんぐん成長し、青物屋の店頭には賑やかに色とりどりの野菜が溢れるように並ぶ。それが道にまではみ出す庶民的なお店、買物客で賑わっている様子も目に浮かぶ。

・幼時より見上げし大樹樟若葉　　翠

庭にあるのか、家の近くにあるのか、幼い頃からいつも見上げ、四季の変化を見ていた木。大人になっても見上げる大樹だが、やはり若葉の頃が最も美しい。樟の方も作者の成長を見守ってきた。

・樟若葉明りの中や石祠　　兵十郎

明と暗の対比。石祠はおそらく古く、くすんでいるのだろう。普段は目立たぬ存在であるかもしれない。今、それを取り巻く若葉光の中で浮かび上がっている。

・むくむくと全方向に樟若葉　　邦夫

「むくむくと」「全方向に」、まさに樟若葉を活写！

今日の兼題の「楠」と「樟」の表記については、中国では「楠」はタブノキ属の木を指すため「樟」と書くが、日本では同じである。また「罌粟」と「芥子」とは同じ花。ご存じのように罌粟は未熟の果実からアヘンやモルヒネを作るので、一般の栽培は禁止されている。従って我々が「罌粟」として詠む場合は雛罌粟が多い。雛罌粟とポピーは同じ。以上グーグルから得た即席豆知識。今日の出句の中に「コクリコと晶子詠じし罌粟の花　　翠」という句があったが、コクリコはフランス語で罌粟のこと。晶子の有名な歌「ああ皐月仏蘭西の野は火の色す君も雛罌粟（コクリコ）我も雛罌粟（コクリコ）」をふまえた句。晶子は鉄幹を元気づけるため渡欧させようとして、百首屏風をいくつも書いて、資金を作った。半年後、夫恋しさに晶子も渡仏、夫に会えた喜びを詠う。

互選三句

朱美　選

三叉路を見つめ幾年樟若葉　　堯子

すり寄れる猫押し退くる薄暑の日　　輝子

街薄暑画廊の奥のかぼちゃの絵　　眞知子

春陽展ですか？名古屋でも画廊の奥に居ましたよ（笑）

瑛三　選

三叉路を見つめ幾年樟若葉　　堯子

蕗茹でて野の香溢るる厨かな　　堯子

登らねば家に帰れぬ坂薄暑　　輝子

実感。夏本番が思いやられる。

和江　選

熊楠の守りし樟に若葉湧き　　堯子

あるなしの風にもそよぎ芥子の花　　太美子

煮豆どうぞの声や戸外は夕薄暑　　翠

一人暮らしの方にきんぴらをおすそわけしました。

かな子　選

納得のゆかぬ句を提げ句座薄暑　　太美子

旧友と会ふ日はあした樟若葉　　輝子

金婚の日忘れて過ぎぬ蕗を煮る　　輝子

厨に満ちる蕗の香りにふと来し方を思う主婦の感慨。

邦夫　選

日を受くるには薄すぎる罌粟の花　　兵十郎

下処理の済みたる蕗のすまし顔　　翠

大空の緑雲となる樟若葉　　暁子

柔らかく伸びゆく樟若葉を大空の緑雲とは言い得て妙。

恵子　選

罌粟の花美人画の首細きかな　　暁子

罌粟の花君には何の罪もなし　　朱美

庭薄暑木陰に愛でる風と色　　乱

風と色を愛でるという表現が素晴らしいと思いました。

堯子　選

首寄せて囁き合うて罌粟の花　　暁子

下処理の済みたる蕗のすまし顔　　翠

旧友と会ふ日はあした樟若葉　　輝子

旧友との再会への期待感と季語の情感がぴったりです。

太美子　選

登らねば家に帰れぬ坂薄暑　　輝子

罌粟の花美人画の首細きかな　　暁子

下処理の済みたる蕗のすまし顔　　翠

下五で俎板の上に美しく並ぶさみどりの蕗が目に浮かぶ。

輝子　選

納得のゆかぬ句を提げ句座薄暑　　太美子

青物屋道にはみ出す薄暑かな　　幹三

どの道も海へ傾げる町薄暑　　幹三

「傾げる」の一言で町の地理的状況を見事に表現。

兵十郎　選

駆けて行く少女の背中追ふ薄暑　　安廣

陽を見過ぎ命短し罌粟の花　　邦夫

樟若葉人恋ひ初めし子の瞳　　輝子

樟若葉の輝きと恋を知った子の瞳の輝きを重ねた作者。

茉衣　選

想ひ出は遠くに捨てて罌粟の花　かな子
朝採りの蕗の苦みのかく淡く　兵十郎
道少し遠く感じる薄暑かな　暁子
日々の散歩で同じコースでも気温の違いで遠近に差が。

眞知子　選

降り来たる闇の匂へる薄暑かな　安廣
罌粟の花美人画の首細きかな　曉子
用心の一枚悔む街薄暑　乱
考えたり迷ったりの一枚だったのに街は薄暑、ああ―。

翠　選

熊楠の守りし樟に若葉湧き　堯子
花罌粟の青の誘ふ他郷かな　太美子
どの道も海へ傾げる街薄暑　幹三
以前行った潮騒の島神島。小さな漁村にも薄暑の風が…。

盛雄　選

樟若葉風を集めてをりにけり　暁子
城の威をやはらげてゐる樟若葉　太美子
どの道も海へ傾げる町薄暑　幹三
どの坂道も海に向って下っている風情ある港町が見える。

安廣　選

どの道も海へ傾げる街薄暑　幹三
樟若葉明りの中や石祠　兵十郎
金婚の日忘れて過ぎぬ蕗を煮る　輝子
すっかり馴れてしまった夫妻の何気ない生活の一齣。

遊子　選

虞美人草供へてありぬ恋の塚　瑛三
登らねば家に帰れぬ坂薄暑　輝子
熊楠の守りし樟に若葉湧き　堯子
楠を聖なる木との民俗学と運動。名前にも楠が刻まれる。

乱　選

人影の無きふるさとの葱坊主　かな子
納得のゆかぬ句を提げ句座薄暑　太美子
忠魂碑覆うて大樹樟若葉　瑛三
若くして戦死した兵士と古木の樟若葉との比較が秀逸。

参加者自選句

知らぬ間に万歩を歩む薄暑の日　朱美
虞美人草供へてありぬ恋の塚　瑛三
軽やかにそよげと我に芥子の花　和江
想ひ出は遠くに捨てて罌粟の花　かな子
むくむくと全方向に樟若葉　邦夫
たかが蕗されど蕗なり母の味　恵子
野良仕事終へて一息夕薄暑　堯子
軽暖の今をのがさじ一日旅　太美子
樟若葉人恋ひ初めし子の瞳　輝子
太き根の岩をも覆ふ樟若葉　兵十郎
舟屋群かもめと眺む海薄暑　茉衣
街薄暑画廊の奥のかぼちゃの絵　眞知子
下処理の済みたる蕗のすまし顔　翠
金魚鉢巨きな顔がヌッと出て　盛雄
爪黒くして蕗の筋取る二人かな　安廣
葛城も二上山も滴りぬ　遊子
用心の一枚悔む街薄暑　乱

ひとこと

山田安廣

先月に引き続き会費の値上げについて議論しました。「欠席者の選句参加は現状維持する一方、会報をデータで送付して紙で残したい人には各自で印刷して頂く」と言う考えと、殆ど自動化できるシステム「夏雲」を利用する考えに集約されて来ましたが時間切れの為、更に継続審議となりました。

俳句については、幹三さんからは「全てを言い表すのでは無く、余白を作る勇気を持って欲しい」と言うコメントがありました。又「薄暑」のように多角的なニュアンスを持つ季語の場合、その「取り合せの妙」を追求するのが好ましい、とのご指摘もありました。